
運命は死んでから恨め

白神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命は死んでから恨め

【Nコード】

N5428BA

【作者名】

白神

【あらすじ】

主人公がなんやかんやで運命を変えられる話です。

変わる運命と新たな運命

偶然だったのか？

それとも、必然？

そんなことを今更、考えた所で意味はない。後の祭りだ。不毛だ。

偶然も必然も運命という概念に捕われた事象だからだ。

「ちよつと！！どいて！！危ない！！」

「あつ？」

じゃあ、こうやって、上空から女の子が落ちてくることが、

「ぐへっ」

運命の巡り合わせなのか？

桜が複雑に舞っている。

春の季節は、やはり桜が一番美しいと俺は思う。

「あゝ、痛てえ」

春というのは、何もかもが心機一転する季節だ。

それは、節目とも言っただろう。多分。

そして、新たな1年の始まりとなるんだ。

「これ、見て!!」

ところで、話は変わるが俺には、幼馴染みがいる。
本当に唐突だなんて俺も思ってる。
ちなみに、自慢ではないからな。

「やった！同じクラスだよ！良かったね！」

奥道来花^{おくみちらいか}、それが俺の幼馴染みの名前だ。

来花は、神社の娘であり、弓道をしている。

容姿は、ぱつっんの髪型でポニーテールで後ろ髪を括っている。
そして、豊満な胸を持っている。さらに弓道をしているためか姿勢
が綺麗だ。なので黙っていれば大人の気品を持った少女に見える。
だが実際は、素直で子供っぽいところもある。そのギャップがいい
んだよね。

あと、弓道ってなんかエロいよね。と俺は思うが皆もそう思ってい
るはずだ。

とまあ、女子とあまり話す機会がない俺にとって、来花の存在は、
大きい。

俺は、女子と話すことには、そんなに抵抗はないが、昔、女子に少
しトラウマを持ってしまったため苦手といえば、苦手だ。
だが、来花は違う。

神様、幼馴染みをくれてありがとう。

さて、もうほとんどの人が気付いていると思うが、今日は、高校の

入学式だ。

先程は、クラス発表を見ていた。

こういう時は、妙に緊張してしまう。

例えるなら、席替えの時に誰と隣になるんだろうかと考えている気持ちに近い。

よく、校長の話で期待と不安というフレーズがよく出るがごもっともだと思う。今の俺も中学生から高校生というランクアップを経て不安であるが、高校生というものに新鮮味を感じている。

校長の話は、ただ長いだけだが、時々、核心につく事を言う。

「入学式には、絶好の快晴だね」

「ああ…、綺麗な青空だ」

俺は、いつも青空を見て、ある少女のことを思い出す。その少女は、俺に言った。

「私は、雲が何を思って、雲がどこに向かおうとしてるのか分かるの」

俺は、なぜ分かるのか聞くけど少女は言う。

「あなたもいずれ分かる」

悪いが俺には、まだ分からない。なぜ、少女がそんなことを言ったのかも、

それに、その少女のことを思い出すこともできない。

だが、1つ分かることは、俺は、少女の言ったことを今後ずっと理解することは、できないだろう。

時間は、少し前に遡る。

「ぐへっ」

俺の眉間に膝が直撃する。鼻の骨、折れたんじゃないのってくらいの激痛が襲う。そして、俺は、そのまま後ろに倒れた。

「ごめん、ごめん。今急いでるから！本当にごめんね！」と女の透き通った声が俺に謝ってくる。なんとも軽い気持ちで謝られたら、逆に清々しい。

怒るのが馬鹿みたいに思える。

「ごめんね」と声が遠ざかっていく。その時に何か金属物が落ちる音がした。

「骨折れたんじゃないのか？」俺は、顔の様子を確かめながら、起き上がる。

もし、パンをくわえてたら、フラグが立つんだかな。となんとも安直な考えをする俺。

体を起こして、すぐに立ち上がる。

俺がいる所は、普通の閑静な住宅街だ。

人が通ることがあまりないが、もし倒れているところを見られたら、恥ずかしい。

俺は、周りを見て、人に見られていないことを確認する。

そして、いざ、学校へ出陣しようと足を前に出した時

「ん？なんだ？これ…」

俺は、前方に落ちているキーホルダーが視界に入った。

俺は、キーホルダーを手に取り、観察する。

キーホルダーの様子は、刀に龍が巻きついていて。よく修学旅行先に売っている剣や刀のキーホルダーに似ている。あと、全体的に真

っ黒だ。骨董品のような高級さを兼ね備えているキーホルダーだ。値段的には、高級感溢れるが、俺は、まだまだ子供なので、
「かつこいいな、これ」って思ってしまった。

「それで、そのまま持って来たの？馬鹿じゃない」

「仕方ないだろ。あの女の落とし物なんだから。それにまたどっかで会つかもしれないしな」

もしかしたら、同じ高校で同じクラスかと思ったが俺の推測は、間違ってたみたいだ。というか俺は、二次的展開に遂期待してしまう癖があるからな。

「いや、待てよ。学校でも会わなかったら、どこで会った？もしかしたら、この帰り道で会うかも？」

今日は、入学式だけなので学校は、午前中までだった。そして、現在は、学校からの帰り道である。この帰り道であの女に会わなかったたら、やはり、現実には、常に残酷だと確信するだけだ。

「どうせ会えないよーだ。」

来花は、前に走りだして、俺の前に立った。そこは、十字路の真ん中、いつも俺達は、ここで別れて、家に帰る。

「私、弓道あるんだけど、来る？私の巫女服姿が見られるよ」

「いや、遠慮しとくよ」

「えー、つまんないなあ！もう」

確かに、巫女服姿は、血だらけになっても見に行きたい。

だが、もし血迷って、来花の神社に行けば、来花の祖父に俺も弓道の稽古に付き合わされてしまう。

はつきり言って、面倒くさいので、諦めるぜ！

「まあ、いいや。じゃあ、また明日学校でね」

「ああ、じゃあな」

来花は、小走りで行って行った。

十字路に俺だけが残された。

俺も本来なら、午後からゲームし放題だから、全速力で帰るのが、俺には、まだ仕事が残っている。

「さて、このキーホルダーをどうするかだが…」

落ちた場所に置くのは、あり得ないな。もう、遅すぎるだろうからな。

それに、交番に届けるにしても、おかしいに他ならない。

道に落ちてた百円を交番に届けるといふ警察からしてみれば、大丈夫か？こいつ状態である。

俺は、そんなに天然ではないので、

「ひとまず、俺が持っておくか。そのうち、俺の前に現れんだろ」

あの女を待つことにした。

だが

《第一設定 完了》

「んあ？」

心臓の音が聞こえる。

誰のだ？

俺は、キーホルダーを視界に入れる。

キーホルダーから鼓動を感じる。

なんだ？普通のキーホルダーじゃないのか？

こういう仕様のキーホルダーとか、ではないな。

それは、俺でも分かる。

なら、このキーホルダーは、一体全体何だ？

「ねえ」

後ろから俺の耳のそばで、女がそう言った。

女の声は、さっきまで一緒に帰ってた来花の声。

俺は、それを反射的に理解する。

「驚いた？」

俺は、後ろを振り返った。どうしても、来花なのか確かめなかった。だが、正体を俺が認識するより先に俺の腹に激痛が走る。

「…」

俺は、自分の腹部を見た。手刀が刺さっていた。声が出ない。

俺は、刺されながら、呆然と立ち尽くすだけだ。

俺は、眼球をゆっくり動かして、手の元を辿る。

そして、俺は、残酷な現実というものを本当に見た気がする。

「来花？お前、なんで…」
「死ねよ」

俺の腹部から素早く手が抜かれる。
俺は、人形のように、足から崩れる。
血が道路を満たす。

初めて、こんな大量の血を見た。
痛い、痛い、痛い。
怖い。

死ぬのか？俺は。
俺は、膝をつき、四つんばいになる。
血は止まらない。

「悪いわね。あなたは、関係なかったかもしれないけど、でもこれは全部…全部あなたが悪運だからなんだよ」

運命は、俺を見放したんだ。
いや、もしかすると、俺は、世界に嫌われているかもしれない。
多分そうだ。入学式の日に殺されるなんて、俺は、本当に運のない男だ。

「死んでくれる？ハハ」

こいつは来花じゃない。
来花は、こんな下品な笑い方はしないんだよ。
俺が何年あいつの幼馴染みを勤めてきたと思ってんだ。

「大丈夫、安心して。気付いたら死んでるから」
死ぬのか。

まだやり残したことがあるけど、もう別にいい。
痛いんだ。

だから、こんな人生を、運命を、
早く終わらしてくれ！

俺は、固く目を閉じた。

でも、一向に攻撃してこない。

俺は、再び目を開ける。

「え？…」

来花（偽）の右横髪が切り落とされていた。

当の本人も啞然としていた。

「その子から離れなさい」

女の透き通った声が聞こえる。

あれ？どつかで聞いた声だ。だが思い出せない。

頭が正常に機能しなくなってきた。目もかすんで、ぼやけて見える。

「離れなさい！スエル！」

「ちっ、ちゃんとこの世界に適應したはずだったのに気付かれるなんて、運が悪いわ」

「言葉が分からないの？」

女は、懷からキーホルダーらしきものを取り出した。

「なん…だよ。あれ」

「デスプリト《雷鳴轟く絶命の槍》」

女がキーホルダーを手に取り、握り潰す。そして、竜巻が起こる。
手に槍が持たれている。両極に刃があり、何かの動物の毛皮が槍を

持つ部分を覆っている。

そして、槍を来花（偽）に向けて、投てきする。

「おっと、これは、逃げなくちゃヤバイ」

来花（偽）は、俺の目の前から消え去った。

そのかわりに、雷電を纏った槍が凄まじい速さで通り過ぎる。

「逃げたか。まあまた追いかければいいだけの話」

彼女は、そう言うと、俺の前に座り込む。

俺は、息も絶え絶えになりながらも、彼女を見た。

でも、霞んで顔がぼやける。かなり近くにいますはずだが。

彼女は、俺の服を捲り、傷を見ている。

今の俺は、服が肌を擦るだけで敏感に反応してしまう。

「俺：死ぬのか？」

さっきまで早く死にたいと思ってたが、死を感じると怖くなってくる。

彼女は、そんな俺の心情に気付いたのか、頭を優しく撫でる。

「心配しないで、あなたは私が絶対助けるから」

俺は、力尽きて、瞼を閉じる。

閉じる前、彼女が笑っているような気がした。

奥道来花が通っている弓道場は、少し町

外れの神社の中にある。

その神社は、祖父が住職している。そして、弓道場の先生もしている。

来花の住んでいる神社も趣があるが長い上り階段がある。

来花は、弓道場に行くために、ビル街を通って行く。都会を巫女服の姿で歩くのは、恥ずかしい。

だから、ビルの間の細い路地を通っていくのが習慣になった。そして、現在弓道場に向かっていている途中である。

「はあ、せっかく誘ってあげたのに、私の巫女服姿見たくないのかな？」

来花は、肩に木刀の入った袋を背負っている。

これは、護身用のために身につけているものだ。

「いや、多分、おじいちゃんが引け目になってるかも……」

来花の祖父は、かなり子供には、厳しい。

知らない子供にも容赦なく叱るし、怒鳴る。

「はあ、次は説得して連れていこうかな」

来花は、最悪強引にでも……と決意する。

すると、来花は、突然立ち止まった。

来花は、自分の横髪を見る。これは、祖父に教わった周囲の異変を確かめる方法。空間に異変があると、空気の振動数が複雑に増加し、不規則な風が起こる。

今、髪の毛を確かめると、髪の毛が乱雑に揺れていた。ここは、ビルとビルの間の細い通路。

風は、一定の方向にしか、吹かないはずだ。

来花は、木刀を手に握りしめ、髪を揺らしながら、後ろを振り向く。

「なっ?!」

来花の目の前には、自分と同じ顔、同じ服を着た人間がいた。

「ん……こっは……」

俺は、目が覚めた。

体を起こして、辺りを見渡す。

どうやら、公園の屋根があるベンチに俺は、眠っていたようだ。噴水があり、照明の光によって、水が輝いて、綺麗な光景が俺の目に焼き付いた。それに、もうすでに、空は、黒く染まっている。

「そっだ。傷は?…ない。治ってる」

俺は、服を捲り、傷があったところ見たが、元に戻っている。

「私の治癒力を嘗めてもらっちゃ困るわね」

「お前が治してくれたのか?」

「そっよ。なんたって私は、優秀だから」

「礼は、言っておくが、今朝俺の顔を膝蹴りしたの覚えてるよな?」

「……まずは、自己紹介しないとね」

「おい、無視するな」

「私の名前は、リライト・クリューリス、フランス人よ。まあ、年

齡は、君と同じくらいかな。そして、私の職業は、オルター」

突然、自己紹介をしたのは、リライトというフランス人美少女。金髪で来花と同じポニーテールで髪を束ねているが、括った髪は、2つに分かれている。

服は、俺は、あまり服には知識が乏しい。

俺が分かるのは、スカートを履いていることだけだ。

「オルター？理解不能なんで説明を求めろ」

「オルターは、時空間移動改变者。オルターの主要な業務は、世界に害を与える事象を破壊すること。他には、世界の監視、管理、保護を行う。そして、もう1つ、オルターの存在意義を証明する業務がある。それが、スエルという事象を削除すること」

「スエルってさっき俺を襲った奴か？」

「そう、スエルは、この世界に来て人間達を襲う事象なの。スエルは、私達オルターに索敵されないためにこの世界に適応しようとする。それがスエルを事象という表現をする理由になってる。スエルは、世界に適応するため、実在する人間をコピーして、コピーした人間を殺す」

「ドッペルゲンガーみたいな感じだな」

「少し違うけどドッペルゲンガーっていう解釈で間違いはないわ。そして、スエルには、1つ弱点がある。スエルは、ネックレスを着ける。そのネックレスは、スエルがこの世界に存在するために必要な楔のようなもの。つまり、ネックレスを壊せば、スエルは、消滅してしまう」

「あいつ、ネックレスなんて着けてたかな？」

「そして、このホルダーは、まあ私のだけどさ」

リライトが俺に見せたキーホルダーは、イタチの尻尾が槍になっているというよく分かん仕様のキーホルダーだった。

「これは、今ホルダー（不動状態）だけど、覚醒させるとシャダ（戦闘状態）になる。スエルは、ホルダーを使わなければ、倒すことはできないの。あと、ホルダーには、いくつかの機能がある。1つは、スエルを引き付ける超音波を放っていること。2つは、ホルダーをどこかになくしてしまっても、持ち主に戻ってくること……」

リライトは、そこで黙り込むが、顔を上げて俺の目を見る。
なんだ？俺、何かしたっけ？

「あなたが拾ったホルダーは、持ち主がいなかった。私は、それがあるところから持ち帰るところだった。でも、あなたとぶつかってあなたに痛い思いさせて、一般人には、絶対触れさせてはいけない持ち主のいないホルダーを落としちゃった。そして、あなたはホルダーを拾って、そのホルダーの持ち主になった」

「持ち主？俺がああキーホルダーの」

つまり、俺は

「あなたは、これからスエルと戦わなければならない。あなたがいやだと言ってホルダーを捨てても、戻ってくる。戦いたくないと言ってもホルダーの超音波のせいでスエルが寄ってくる。あなたは、戦いの運命から逃れられない。私は、あなたの運命を歪ませてしまったの。ごめんなさい」

リライトは、俺に向かって頭を下げる。

「はあ、俺は、別に怒ってないから頭上げてくれ」

「え？なんで…」

「正直、ホルダーとかスエルとかオルターとか意味が分からん。それに運命が歪んだとか戦う運命だとか言われてもピンと来ない。それに、俺は、女を責めるような小さい人間じゃない」

まあ、今怒ったところでもう遅すぎる。すでに俺の運命は、変わってるんだからな。

「許してくれるの？」

「ああ、それに俺、怒んの苦手だし「ありがとう！」

「うおっ?!」

リライトが俺に抱きついてきて、上目遣いでお礼を言った。満面の笑顔だ。フランス人の女性の笑顔は、ルビーのような輝きを出すんじゃないの？と思うくらいの笑顔だ。やはり、笑顔は万国共通だな、うん。

「そうだ！あなたの名前をまだ聞いてなかった」

その時、俺の携帯の着信音が鳴り響く。ちなみに、着信音は、アニメの曲である。

俺の携帯は、スライド式であるため、誰から来たか即分かる。

「来花からか？」

まさか、また弓道場に来てって言ってんじゃないだろうな？と思いながら俺は、携帯をスライドさせて、メールを見た。

そこには、短い文が書かれていた。

「助けて、だど？どういう…」

「ん！スエル！」

リライトは、後ろを振り返り、空を見上げる。

「あなたは、ここにいなさい！スエルが来たから！終わったら戻ってくる！！」

リライトは、走り出した。俺は、携帯画面を見る。

来花からのメールを見る。俺は、スライド式の携帯を強く閉じた。

暗闇に包まれた道をリライトは、走っている。

立ち止まることはできない。早く行かないと一般人が、関係のない人が襲われてしまう。

リライトが少し速度を上げて走る。

「待て待て待て待てえええ！！！」

後ろから声が聞こえる。

リライトは、走りながら、振り返った。

「ちょっと、あなた！ついて来ちゃダメって言ったでしょ！」

俺は、リライトの横まで行く。

「俺の幼馴染みがスエルに襲われてるはずだ。なら俺が助けに行くしかないだろ」

「でも、戦う覚悟はできてるの？あなたは武器を持って戦った経験はないはず。そんなので助けるなんて言うのは、勇気じゃない」

よくこんなに走ってて、息が切れないな。本当に女か？

「確かに、俺は、武器を持って戦ったことはない。お前を大人みたいに難しい言葉で言い負かすこともできない……俺は、まだ子供だから、子供なりの理由でお前を負かしてやる」

俺は、一回言葉を切って、息継ぎする。

「俺は、自分の手で来花を助けたい！救いたい！守りたいんだ！これが俺の覚悟だ！！」

俺がそう言うと、リライトは走るのを止める。

そして、胸元のポケットから俺が拾った龍のホルダーを出した。

「あなたが幼馴染みを助けなさい。でも、負けたら承知しないわよ」

俺は、リライトからキーホルダーを手渡された。

「ホルダーにああなたの思いを込めながら、握り潰しなさい」

「分かった。ありがとう」

そして、再び暗闇を走りだした。

「はあ…はあ…」

来花は、ビル街を走っていた。

木刀は、無惨にも折られていた。

来花は、折れた木刀を背後に投げようとして、後ろを振り返る。

「あっ…」

「逃げてても無駄、お前は、私に殺される」

来花（偽）が手刀を横に薙いだ。来花に当たるところだったが間一髪で避ける。手刀は、速度を落とさずに壁を破壊する。

来花は、尻餅をつく。

逃げようとして立ち上がろうとしたが、腰が抜けて立ち上がれない。

「服はボロボロ、木刀も破壊した。もう死ぬのは分かってるでしょ」

いやだ！死にたくない。来花は、そう思いながら、首を横に振る。

「はあ…はあ…、っ！いた！」

俺は、来花を見つけた。

そこは、ビルとビルの間の細い路地だ。

来花と来花（偽）は俺が来たのにはまだ気付いていないみたいだ。

「さて、そろそろ死んでもらおうか」

これで私もこの世界に適応することができる。

「止めて、誰か助けて！」いやだ、死ぬのはいやだ。

俺は、キーホルダーを握る。そして、守りたい、それだけの思いを拳に込めて、握り潰した。

「うつ、なんだ?!」

俺を白と黒のオーラのものが包む。

着ていた服が焼け焦げていく。そして、かわりにリライトが着ていたような服が俺を包む。ちなみにズボンだ。

「何? あれ…」

「まさか…オルターか?!」

俺は、炎を纏ながら、前に進む。

歩くたびに炎は、消えていく。

「お前は誰だ?!」

「おいおい、俺を殺そうとしたくせに、もう忘れたってか? まあ、どうでもいい。俺は、お前を潰しに来た」

俺は、来花の前に立つ。

炎はすべて消え去り、視界も良好だ。俺の右手には、日本刀が握られており、なぜか髪の毛がお前、貞子ですか? と聞きたくなるほどの長さまで伸びていた。

「なぜ? お前がオルターになっている」

来花（偽）がそう聞いてきたが無視した。

俺は、足に力をいれて、来花（偽）に瞬時に移動する。

「覚えとけ。俺の大切な人を傷つけたら、遠慮なく、潰す!」

俺は、刀を振り下ろし、真っ二つに斬った。

スエルの弱点であるネックレスもぶっ壊した。
ネックレスは、泥人形のように崩れていく。そして、来花（偽）は、風化していき、消えていった。

来花は、気絶していたため公園に戻り、ベンチに寝かした。

リライトが治癒して、来花は、回復したがまだ眠ったままだ。

「あなたも無事、オルターになったわね。それに幼馴染みも助けられたし」

「まあ、もう普通には戻ることはないな。そういえばなんで俺の髪の毛がこんなに伸びたのか説明を」

「ホルダーを覚醒させると、肉体の活性化から始まり、恒常性などの肉体的本能行動と無意識下の潜在能力を急激に進化させ」もう、いいです」

つまり、お前は、オルターになって、人外の力を手に入れたんだ。みたいな感じだろう。

「明日、またいろいろと忙しくなると思うから、覚悟していてね」

「はいはい、分かったよ。」

空が俺達の上にある限り、運命には、抵抗することはできない。だが、それは、自ら、運命を変えようとしなければの話だ。

ある少女は、俺に言った。雲が何を思い、どこに行こうとするか分かる。

俺はやっぱり分からない。だから、これから運命を変えよう。
俺の運命を

「そうだ！あなたの名前を聞こうと思ってたのよ」

「あゝ、言ってなかったな。じゃあ、ここで名乗っておくか」

俺のこれからの人生がどのようになるのかは、分からんが、せいぜい、この運命を恨まないように生きていこう。

「俺の名前は、鞍馬白真だ。よろしく」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5428ba/>

運命は死んでから恨め

2012年1月14日22時50分発行